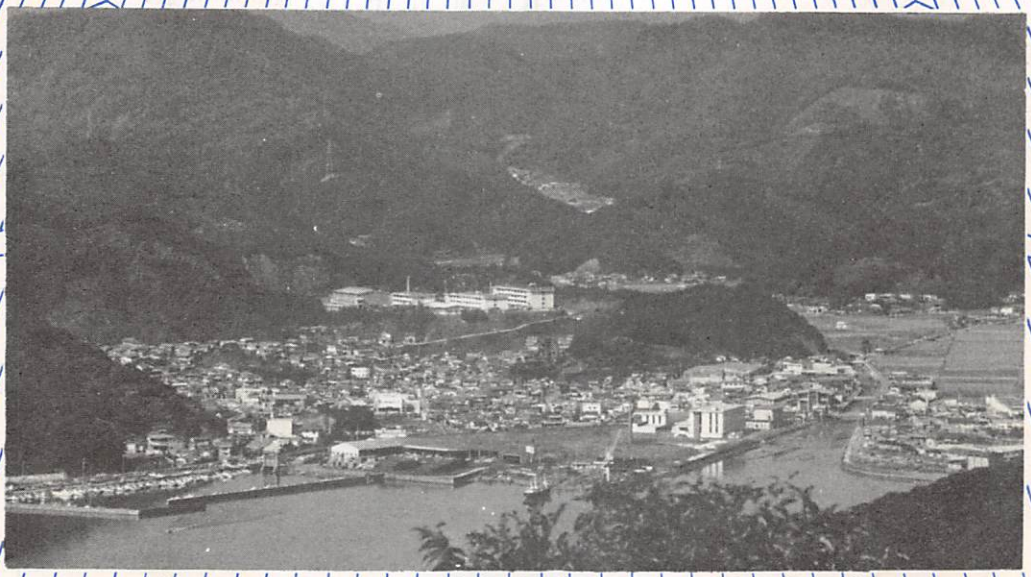
第9号
1984

会報

にしきうら



（テレビ塔より、旧高知県造船所、母校を望む）

高知県立須崎工業高等学校同窓会

目　　次

御　挨　拶……同窓会長　清　家　　寛……1

母校跡地記念碑建立計画について

須崎工業高校の同和教育……学校長　宮　地　恒　雄……2～3

学校近況……教　頭　竹　村　義　典……4

最近の進路状況について……進路指導部長　髙　橋　宣　彦……5

窪川支部だより……川　添　　泉……6

関東支部だより……片　岡　命　長……7

高知支部だより……吉　岡　豊　延……8

大阪支部だより……松　村　隆　司……9～10

インターハイ(軟式庭球の部)に出場して……吉　門　卓　史……10～11

糺の池で大鯉が釣れる……11

昭和58年度決算報告……12

昭和59年度予算……12

事務局だより……事務局長　島　崎　良　一……13

終身会費納入者名……14～21

会　　則……22

各種証明証の発行について……23

編集後記……23

ご挨拶

母校跡地記念碑建立計画について

同窓会長　清家　寛

同窓会の皆様、お元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

会報もお蔭さまで第九号を発行することができました。

事務局の先生方には、御多忙の中さぞかし御苦労の多かったことと思います。そのご労苦と御努力に対し、会を代表して心から感謝とお礼を申し上げます。また御多用のところ本会のため御寄稿下さいました方々に対しましても深く感謝と御礼を申し上げます。

さて、前号で御案内しました母校発祥の地（紀町の旧校舎跡地）に記念碑を建立する計画について、その後の経過を報告します。

昨年より須崎支部役員の方々がお世話下さり下準備も整い、去る八月二十一日「記念碑建立実行委員会」を開催出来ました。その結果須崎市在住の委員の方々が中心となって、具体的な建立計画を作成下さることになり目下原案が練られております。

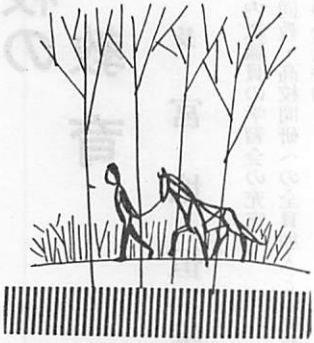
実は、本会報にその具体的計画を発表する予定でしたが、作業が遅れ間に合いませんので悪しからず御容赦下さい。

何れ計画のまとまり次第、改めて御連絡したいと考えておりますので、その節にはどうか、よろしくお願いします。

記念碑は旧校舎に学んだ者にとっては勿論ですが新校舎に学んだ者にとっても、母校の歴史と共に尊いしるしとなりましょう。

記念碑建立計画の遅れておりますことをお詫びしますと共に、その完成の一日も早からんことを願ってやみません。

終りに臨み、母校の末永い御発展を祈念いたしますと共に、同窓の皆さんには健康で、ます〳〵ご活躍されまして共に、幸福な人生を築かれますよう心からお祈りします。



（記念碑建立予定地）
旧機械科工場付近
現ゆたか公園
ショッピングセンターゆたか
屋上より撮影

須崎工業高校の同和教育

校長　宮地恒雄

同和対策事業特別措置法が地域改善対策特別措置法にひきつがれて十五年が経過しておりますが、今日いぜんとして部落差別は解消されておりません。

いわれなき差別の解消は国民的課題であり、本校でも同和教育を、教育方針の四本柱（規律、勤勉、友愛、美化）の中の一本として大きく取り上げております。

ここにその取組みの一端を御紹介申し上げて、御理解をいただくと共に御意見等お寄せ下されば幸甚と存じます。

昭和五十九年度同和教育年間計画

一校内組織

同和教育部を設置し、同和教育主任二名を含め十名で構成

二同和教育重点目標

1進路保障（基礎学力の向上、基本的生活習慣、休退学者をなくす。進路保障）

2「部落研」活動の充実

3部落問題に関する科学的認識を深める。

4教職員の同和教育の研修を深める。

三教職員の取りくみ

1ホーム主任と同和部の連携

2校内教職員の学習会の充実

3須同教・高校同研への全員加入と須同教夏期講座への全員参加

「須同教」「親の会」への参加

4校内同研（各期末試験の第一日目）

5ホーム主任による家庭訪問

四同和奨学生

1家庭訪問・学校訪問

2個別面談

3校内奨学生集会

4親の会、友の会活動の充実

5生活・成績面についての指導

6研修会への参加

五年間指導計画

○一年「被差別部落の歴史」オリエンテーション、アンケート実施、ロングホーム指導、クラス討議、講演、一年間のまとめ

○二年「差別の実態」班別学習、クラスのまとめ、講演、クラス討議、一年間のまとめ

○三年「解放運動」班別学習、クラスのまとめ、フィールドワーク、視聴覚利用、さよなら講演、一年間のまとめ

○他に夏休みの課題、テキスト「高校生の部落問題」の全員購入

六PTA

1父母への啓発（PTA総会等で同和映画上映等）

2須同教への加入等

概略以上ですが、これら諸実践の中からごく一部ですが取り上げてみたいと思います。

先づ最初は、入学間もない四月に新一年生を対象に実施した同和教育アンケートであります。

それによると、被差別部落のあることを知っている者が九〇%で、先生に教えてもらって知った者が五七%と一番多く、学校での指導がきわめて大切であることがわかります。次いで家庭で、が一七%であり、被差別部落がどのようにしてできたか、という最も重要な問に対して、「封建社会の支配者が自分達に都合のよい政治をするためにつくった（正解）」は五二%の低率で、「人種起源説」等の誤答が二三%あり、中学校における同和教育のバラつき乃至は定着率の低さを、本校でどうやって高めていくかが問題であります。

また、「部落差別は許せないと思う」が四七%あるが、「部落差別をかわいそうに思う」が三三%あり、これまた低迷している意識を高揚させなければなりません。

「どのようにしても差別は無くならない」と悲観的に答えた者が一三%いるが、「国が政策をたてるべきだ」が三七%、「差別をなくする教育を徹底せよ」が三六%で、合計七三%が国の政策や教育に期待していることがわかります。

二つ目は三年生のフィールドワークをふり返って

みたいと思います。これは現地学習を行うことによって、これまでの学習を自分の目で確かめ、肌で感じようということであります。実はこのフィールドワークは本校としては全く初めてのことで、市役所・親の会、市民館、漁協等多くの方々の御協力により実施できたものであります。

当日は三年生全員が西糺町の勤労青少年ホームへはいり、市民館長さん等から講話及び西部ポンプ場の説明をききました。地域のかかえている人口密度の問題、失業率の問題、道路幅の問題等大変具体的にわかりやすくて感銘をうけました。西部ポンプ場設置によりはじめて地区が冠水地帯から救われたという話もよく理解できました。

引き続き四班に分かれて、順次ローテイション方式で見学、現地学習を実施いたしました。

新荘川の川口にある旧漁港は、川口が砂でふさがる度に船は海へ出られない。その日もちょうどそんな状態で、パワーショベルがやってきて、川口をふさいでいる砂を取り除き作業中でした。船を航行できるようにするまで、どのくらいかかるか見当もつきませんでした。新しい新荘漁港はそれに隣接してはいますが、川とは関係なく直接海につながっているので、ゆうゆうたるものであります。私たちは説明をききながら、新漁港の重要性を正にまざまざと見たわけであります。

しかし、この新漁港においても台風時等における高波を、現状では防ぐことはできず、他の漁港に避難しなければならないなど、課題も残されているようです。

続いて、漁具倉庫、須崎ニット工場、魚市場、シラサ加工場を見学、現地説明を受けました。この日のフィールドワークは生徒はもちろん引卒教員にとっても極めて有意義な学習となりました。

三つ目は、部落問題研究部の生徒たちの作ったスライドです。市教育委員会や市同和対策室、錦浦漁協ほか各種漁協、市民館に協力をいただき、「海に生きる」＝被差別地区の漁業をおって＝と題しまして六十二コマで二十五分間のスライドを作成したものです。写真、音楽、ナレーション、編集等相当長期間にわたり夜遅くまで苦労したようです。その甲斐ありまして、昨年秋の本校文化祭で初公開して好評をはくし、その後須崎市内の各種会合でも利用していただいております。

四つ目は「部落差別をなくする運動強調旬間」の取り組みについてであります。昨年に引き続きまして今年も七月に、「部落研」や生徒会執行部が体験実習として、同和問題の正しい認識を訴えるビラを配布し、また広報車による啓発活動を行いました。市民の心ある人々の注目を浴び、高知新聞にも紹介されました。

五つ目はPTAの同和教育への取り組みについてであります。PTA総会の日の昼休みに、同和教育関係の映画の上映を、一昨年から行っていまして大変好評ですので、今後も是非続けてまいりたいと存じます。また、今後はPTAの諸研修の機会にも同和問題に積極的に取り組んでまいるよう、PTA役員さんと共に計画してゆきたいと存じます。

同和教育部がまとめた生徒の生の意見の中に、次のようなものがありました。

「部落問題というものは、世界の人々の中に差別をしようとする考えの人がいるから、いつまで経っても無くならないと思う。たしかに、ある程度の進歩はあったけれど、それは表面だけで裏にはまだいくつかの見えにくい差別があると思う。人々は国が悪いなどと言うが、自分たちがやらなければだめだと思う」と指摘しております。部落差別を無くするためには、一人ひとりが主体的に学習に取り組み、自らの意識を変革しなければならない、と言っているわけであります。

わが校の同和教育について、ごく一部分を紹介させていただきましたが、現実にはまだまだ問題点や不充分さがたくさんあります。しかし「部落差別を二十一世紀へ持ち越してはならない」を合言葉に、教職員一同力を合わせまして、今後いっそうの努力を続けてまいりたいと存じております。

フィールドワーク中の三年生

学校近況

教頭　竹村義典

昨秋は三年に一度、恒例の文化祭が盛大に行われました。前日、仮装行列で市内を回り、当日は工業校としての催しの他に、お化屋敷、模擬店、餅つきロックコンサート等もあり、やゝお祭り的でしたが矢張り人気があり、特に中高女生徒が多く、生徒達は大喜びでした。

昭和五八年度卒業生は機械科六八名、造船科一〇名、化学工業科一九名、電気科七一名、計一六八名で、卒業生総数は六一三二名（女子五二名）となりました。そして新入生は二一四名で、在学総数は段々に増加し、来春は定員（七二〇名）に近づくものと期待して居ります。

人事異動では、通算二〇年も本校で生徒の健康管理にご盡力いただきました養護教諭の橋田美智子先生が退職されました。永年のご労苦に対し感謝申し上げます。また一五年間にわたり、電気科および教務部長としてお世話になりました小松陽一先生が東工業高校へ、図書室司書として一〇年間勤務されました奥田（旧姓池上）由美さんが高岡高校へ転勤され一寸淋しいことですが今後のご活躍とご健勝を祈り、ご指導いただきましたお礼を申し上げます。

以下、人事異動を紹介します。

転任（退職）

橋田美智子（養）退職
山中顕夫（社）追手前高
（吾北）
岡田　健（数）須崎高
吉村隆雄（理）丸ノ内高
加藤奉良（体）追手前高
吉岡義友（機）東工高
滝　直道（〃）宿毛工高
橋本泰男（化）小津高
小松陽一（電）東工高
奥田由美（図書）高岡高
原　正人（社）宿毛高
切詰晴典（国）伊野商高
川崎太一（美）東工高他
今西利恵（国）須崎高（久礼）
北村公良（理）中芸高　森本民之助（理）時講

右記の如く惜しい先生方を送り出しましたが新進気鋭の先生方と矢野象一先生他ベテランの方々をお迎えして居ります。

着任

川田　環（養）高岡高
松崎　周（社）宿毛高
（大月）
千頭一元（数）仁淀高
岡村栄俊（理）新　採
橋田晃一（体）窪川高
矢野象一（機）高知工高
山縣秀人（〃）期　講
横田真一（化）　〃
川窪　馨（電）新　採
吉村典子（図書）〃
吉本　伸（社、機）期講
保木正枝（国）時　講
宮崎昭夫（美）清水高

今、学校として特に希望しておりますのは、多目的棟の建設です。この事につきましては、前号で校長先生が詳しく書かれてましたが、新設高校建築の為に具体化しておりません。南校舎に連続して、グランドの方へ延長すべく計画され、各科共通で利用できるマイコン室、宿泊研修室、トレーニング室、新しい図書室等予定され、早期実現を熱望するところです。同窓会本部では、旧校地「ゆたか公園」内に母校開校記念碑の建設計画も進んでいるようです。

クラブ活動では、昨年ソフトボール部から国体少年チームに片岡正人、三宮正裕、浜口直己君等三名が選ばれ、準優勝した為、県体育協会より表彰を受けました。ヨット部は今年も国体出場権を得ております。軟庭部では吉門、武田組が県体で個人六位となりIH（秋田）に出場、陸上部も井上君が県体で一〇〇米、円盤投、砲丸投の三種目に入賞、IH四国予選に出場しましたが、落選。野球部はエース投手が負傷し、甲子園予選、新人戦共に伊野商と対戦敗れました。その他各部共活動が年々活発になり、グランド、体育館からは、練習の元気な掛声が聞かれ、暑さの中、頑張っております。

さて、ここで一人の同窓生の活躍についてお知らせします。窪川町出身、東京在住の友永詔三氏（昭和三八年三月機械科卒）です。彼はオーストラリアで人形製作を学び、帰国後はNHK連続人形劇「プリンプリン物語」の人形製作を担当。各地で個展を開き、新世代の人形作家として注目されております。

近年はニューヨーク市でも何回か作品発表を行ない国際的に活躍されてる由。去る四月に高知大丸で「木と紙の造形 ― 友永詔三展」が開かれました。独特のバイオリンを自作、自演して世界を巡ってる長山氏の話も聞きました。同窓生は六千名を越し、工業界はもとより、各界でご活躍の話は、母校にとって誠に嬉しい限りです。

皆様方の益々のご発展とご多幸を祈ります。

最近の進路状況について

進路指導部　高　橋　宣　彦

同窓会の皆様には、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。

又、日頃は、後輩の就職等に種々ご支援を頂きましてありがとうございます。

さて、最近の本校生徒の進路状況につきまして簡単にご報告させて頂きます。

皆様方すでにご承知の通り、高卒の就職は冬の時代を迎えたといわれております。

ＯＡ化、ＦＡ化、又定年延長や離職率低下による人員的飽和などの構造的要因が大きく影響し、大巾な景気回復がない限り高卒者に対する求人の増加は望めない状態ではないかと思われます。

本校においても例外ではなく、ここ十数年の最低レベルにあります。

従って地元企業からの求人も減り、県内就職希望者が、やむを得ず志望を変更し、県外へ就職するケースがここ二、三年増加しており、別表Ｉのような結果となっております。

地元企業への就職が比較的むずかしい原因としては、

一、安定した大企業が少ないために一部企業からの求人に対して、応募者が集中し競争が厳しい。

一、高知市内へ通勤となると地理的に不利な生徒が多く、中小企業であっても、寮の設備が完備している企業に限定されること等が考えられます。

従いまして、本年度の応募、内定状況も県外企業中心となっておりまして、十月十五日現在の内定者の県内外の数字は別表IIのようになっています。

今後においても、ある程度はこの傾向が続くと考えられます。

同窓会各支部の皆様方には、今後益々ご活躍いただきまして、後輩のご指導、ご鞭撻をお願いいたしたく存じます。

又、学校の方へも、種々、お気付きの点など、よろしくお願い申し上げます。

年度	生徒数	進学	就職		未定その他
			県内	県外	
57	174	24	68	69	13
58	168	14	76	74	4

別　表　Ｉ

年度	生徒数	進学希望者	就職希望者		その他
			県内	県外	
59	156	14	77 (18)	61 (60)	4

別表II　59年度３年生進路希望
（　）10月15日現在の内定数

（ポスターは生徒作品）

◀友永詔三作

窪川支部だより

窪川支部発足の御挨拶

21機卒　川　添　　泉

同窓会々報の誌上を拝借致しまして窪川支部会員並に各界に於て御活躍の同窓の皆様方に対しまして一言御挨拶を申し上げます。

当支部設立につきましては過去幾度か設立準備会を設け努力致して参りましたが機運熟さずと申しますか、今日迄私共の力不足の為に支部設立が延引致して居りましたが、ようやく本年四月十八日窪川農協会館に於て宮地校長先生、清家会長さん、島崎事務局長又幡多支部から吉村功、松沢眞三両氏各位の御出席を賜り窪川支部設立総会を開催いたしました。

席上支部長には皆様方御案内の原発推進町長として全国的に名声を馳せました藤戸進氏を御推薦いたしましたが公務多忙の為に不肖私が支部長をお受けする事と成りました。

浅学非才の輩でありまして、会員諸兄の御期待に応えうるか、一抹の不安も御座いますが御受け致しました以上皆様方の御支援御指導を頂きまして精一杯勤めて参る所存であります。今後共よろしく御願い申し上げます。当支部は母校の発展はもとより会員相互の親睦を第一とし又同窓会を通じて地域社会発展の為に努力すると宣言致して居ります。歳月の流れは誠に早いもので御座います。

はや戦後三十九年の経過を見たわけであり此の間戦後動乱期の卒業の皆様方には大変な御努力の結果今日では各界でのリーダーとして御活躍の程御同慶の至りであります。又此の間若い世代の多くの同窓生が吾が窪川町高南台地一円に於いての活躍を見る時須工同窓生の一員として誠に心強い感が御座います。

今後は当支部結成を契機と致しまして新旧同窓、年齢を又時代を超えての和と親睦を第一として同窓会を通じて交友を密に致しお互会員が公私共に御発展されます事を心から祈念申し上げるものであります。最後に皆様方の今後益々の御健勝御繁栄を心からお祈り申し上げまして私の御挨拶といたします。

昭和五十九年四月十八日窪川支部総会において選任されました役員は、次の通りですのでよろしく御支援の程お願い申し上げます。

役職	氏名
支部長	川添　泉
副支部長	國枝　幸治
〃	徳弘　善三
監事	田辺　守正
〃	佐々木善喜
会計	竹内　淳悟
名誉顧問	藤戸　進

旧校舎跡
ショッピングセンターゆたかの
建物附近が造船科現図室
北の山より撮影
写真右上は角谷の日鉄工業

関東支部だより

銀座祭り

20機卒　片岡命長

「だんな、銀座どうでした？出たんでしょう。天気は上々だったですよね」神田駅前の赤ちょうちん街に〝小次郎〟という止り木が10いくつか並んだ店、3ケ月位前、通りがかりで一杯やったのが縁で、月に一回程立寄るようになりました。今、ちょうちん街に人気のある〝酎ハイ〟をやりながら焼とりを食べるんです。酎ハイはさっぱりしていてアルコールが好きなのに、全く弱い私にはうってつけの飲み物になりました。

〝光と音のパレード〟今年の銀座祭りに揃いのゆかたを着て〝佐渡おけさ〟で参加することを話したのを、〝小次郎〟のおっさんはちゃんと覚えていたんです。

「天気が良くて、一寸冷たい位だったんで踊ってゆくには絶好だったんですよ。楽しかったですよ……とても」

去年に続いて今年も銀座祭りに出ました。今では若者達に新宿、原宿へと去られたといっても、やはり銀座はお江戸のメインストリートに変わりありません。その大通りの詰めかけた大観衆の前で、あのゆったりとした〝佐渡おけさ〟のおどりが一杯に展開され、その一団の中に私が入っていたんです。（いや、かろうじて入れてもらっていたと言った方がいいでしょうか）

「何で手をかつぐの」、「左手がダメ」「下を見ない！」「又、おくれているじゃないの」。銀座の本番が近くなって夜のけいこは熱をおびてきました。

何時もは、柔和で少なからず？色気のある先生の表情がきびしく、〝何で右足が後へ出ていくの〟と言われる日が続きました。

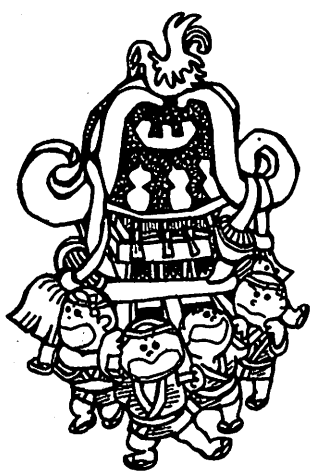
私がおどりを習い始めた動機は極めて単純なんです。8月にあちこちで始まる盆おどりが気軽におどれるようになりたかったんです。勿論、花のお江戸の銀座を〝おけさ〟で流す？なんて夢にも思いませんでした。物をおそわるということは厳しさが無いと真剣になりません。真剣にならないと、いい加減なものしか身につかないんです。私はけいこの時、先生の後でおそわるようになりました。とぎすまされて歯切れよく、無駄の無い動きを少しでも盗もうと汗びっしょりになってついてゆきます。

「百人以上いて、男性が5～6人とはうらやましいですね」何か含みのありそうな顔で〝小次郎〟のおっさんは話しかけてきます。とんでもない？それどころじゃあないんです。それに踊っているのは女性じゃなくて踊り子なんでね。ましてこちらに余裕がなく、間違わず、おくれずと言うことで頭が一杯なんですよ……。残念ながら……」

いよいよ〝おけさ〟の波は、四丁目の交差点に近づきました。ここをおどりながら通り抜ける時は一番緊張し、又参加して良かったと思う時なんですね。一周3㎞のコースには間隔を置いて、スポットライトとカメラが並んだ台があって、今年も銀座祭りの為に、佐渡は相川町の皆さんが遠路参加くださいました。盛大な拍手をお願いしますと、見物の人々にマイクで呼びかけがありました。

長い様で短かい時間が過ぎやっと終り着替えて、大西先輩の知っている中華料理店で食事をとり帰途につきました。電車が銀座駅を出ると「先生と大西さん、ねむっていて大丈夫です。私が起こしてあげるから」と言った、石川先輩があっと言う間にこっくりこっくり。そして流石の先生もほっとされたのか石川さんと頭をくっつける様にしてねむり始めました。

何時の間にか止り木が一杯になった〝小次郎〟を、「次に又、ゆっくり話を聞かせて下さいね」と言うおっさんの笑顔に送られて日暮れの早い街に出ました。



高知支部だより

59年 秋 この頃思う、『隔世の感』と言うこと

20機卒 吉岡豊延

私が自営開業をしたのは、32年前の昭和27年9月15日で、23才の私は髪も適当にフサフサしていて葉山村は、未だ日中は暑い初秋であった。

程なくして雇い入れた社員（その頃は弟子と言っていた）は18才と21才で、私とは2才違いでしかなかった。

今年、私の会社へ入社した社員の一人は17才で、私の子供より下だし、その親も私よりズッと若い。いつか招かれて母校（須工）の卒業式で講演した時も、壇上から見る親の顔に私の後輩が沢山いた。〝遙るけくも来つるものかな〟と年月の隔たりを現実的に感じるが、これも一つの隔世の感である。

今年の5月、「開校記念日」に呼ばれて久しぶりに母校で在校生諸君に話す機会をもったが、その全体会場の整理について、担当の先生より注意のでる場面もありました。先生方は焦燥されたことだろう。

私の記念講演中でも、私なりにイライラして困ったことである。元来私は「話」が好き、「読む」が好きで、高知市内に於ける文芸講演会とか夏季大学は大低欠かさない。

先日、故あって、とある起工式へ参加したが、皆さんが神前の礼式（二礼二拍手一拝）を殆んど知らなくて、神官さんがポカンとしてそれでも一応厳粛にかまえているのを、おかしく感じたことである。

母校創立の頃、国語に、太田幸吉先生がいて、時代背景もあっただろうが、神道のそういうことや、文字のヘンなどを相当キツク教えられたのを、その起工式の「玉串奉奠」が私の番になった時、その建物の美しい完成を祈る心より先に、太田先生になろうちょったけ、今日の誰よりも立派に玉串が捧げられるぜよ！と心の中で愉快に思ったことである。

私の会社の新入生（17）が喫煙していて、「親もよう止めん」と聞いたので、「止めにゃ、止めにゃ！」と、夜だったけれども彼の家に電話をしたら20分程して返事がかかってきたので「タバコを止めるか会社を止めるかどちらなら」「タバコを止めます」でそれはバッチリと決ったことだが、バイクで接触して40日も休んだり、昼休みに喫茶店へ行って、「アメリカン」と注文して、マンガを読みふけったりが非常に当り前だったり……。

「人の話をロクに聞かん事らは今の常識ぜよ」と人は言う、だから隔世の感である。

それでも私は、「今の若い者は……」とはなるべく言わない。十人中、否、百人中に5人位はキチンとした青年は居るから。

そう言う者を追跡したら必らずと言ってよい程、家庭環境が整っている。

「イモのつるにナスビはならない。」「センダンは双葉より芳し。」「トンビがタカを生む。」「子を見りゃ親の顔がわかる。」等々……

親子関係を表わす諺は昔から多い。

卒業生を雇う時は百人の中の五人へ賭るし、親も教師も勿論、百人全部をと、そう願って教育を授ける。

一昔との隔世の感を、「世は変っても底を流れるものは同じです。唯、外面が少しキラビヤカになっただけですけに、そう評価を下げなや」と言ってもらいたいし、殆んどの人々が本当は努力していると思います。

すばらしい須工から、すばらしい卒業生が沢山出て下さい。

私達の頃から40年もたったことだし「沢山生徒が集まれば少しはガヤガヤも言いたいし、作法も時には忘れます。けんど先輩から少しは「須工精神」も教えられちゅうけに心配しなや」そんな声も聞えるような。

――とりとめもなくそんなことを、それでもまじめに考えよります――59・10・10

大阪支部だより

32年機卒
松村隆司

初秋微涼の季節となり野山も俄に秋色をおび、木の葉のそよぎにも涼気を覚えます。

本部の皆様又全国同窓生の皆様お変りなく御健勝御清栄の事と御拝察申しあげます。

扨大阪支部は昭和57年11月支部総会に於いて以来山田豊氏（昭21年機卒）支部長の基に和気あいあいの活動を展開して居ります。

中でも『よさこい会』と名付け（奥代氏名付親）ゴルフ大会を開催致して居りますので御紹介致しましょう。

よさこい会

よさこい会々則の目的は『会員相互の親睦を図ると共に母校の隆盛に心掛け誠実に維持発展に努める事を目的とする』と記し第一章総則から第七章補則第18条に至って居ります。

遠く母校を離れた卒業生が大都会の煩わしさを逃れ清い空気の自然の中で、土佐弁を使い、校歌を口ずさみ乍ら旧交を温め親睦を深め珍プレーに笑い、好プレーに拍手を送り、又明日への活力として楽しんで居ります。

山田支部長も自からクラブを振り炎天下の激闘に苦しんで居られます。又前々回母校の長老でもあり大阪支部の最年長、山田弘市氏（59才）も参加下さって、グロス93で準優勝には頭の下がる思いでした。

左記に過去13回の大会記録を紹介しましょう。

回数	優勝者	NET	期日	曜	場所
第1回	汲田正一	69	昭55・4・13	土	スポツ振興CC
第2回	松村隆司	72.1	昭55・7・5	土	神有カントリCC
3	大崎光春	76.8	55・9・6	土	奈良デアパGC
4	田村武夫	74	55・11・15	土	甲賀カントリCC
5	橋本盛幸	74.5	56・4・26	日	スポツ振興CC
6	松村隆司	75.8	56・6・27	土	三田ゴルフC
7	松村隆司	73.4	56・9・15	火	スポツ振興CC
8	松村隆司	73.6	57・3・27	土	スポツ振興CC
9	中止雷	落雷	57・6・20	土	信楽カントリCC
10	瀬竜雄	66	57・9・15	水	スポツ振興CC
11	崎満良	68	58・8・6	土	スポツ振興CC
12	本逞一	66.4	58・11・3	木	天野山カントC
第13回	崎満良	141.8	59・3・10	土	土佐CC桂・室C
	浜崎	2日間	昭59・3・11	日	土佐CC足摺C

以上が過去の成績表です。

中でも第13回、我故郷高知の土佐CCで開催した二日間のよさこい会コンペは誠に盛大で意義深いものがあり強烈な印象を残しました。

総勢28名が各々の思いを込めてスタートし珍好プレーに沸きながら無事一日目を終了し夜は市内のホテルで豪華な料理に囲まれ、土佐名物の皿鉢料理や、生造り、鰹のタタキや、うまい酒、情けの深い女性に囲まれて、夜を徹して飲み歌い歓喜の渦に浸りました。

翌早朝より第二日目の競技に挑み二日酔で乱れる者、睡眠不足で顎の上がる者、かと思えば優勝者の（浜崎氏）様に日頃出した事のないベスト、スコアーで回る人、それにしても藍色に輝く太平洋に向って打つ雄大さはさすが土佐のゴルフ場、温かさにも恵まれて競技終了後二日間の成績発表時には又賞品に笑い罰金に泣き、馬券に又泣笑いしながら土佐CCを後にした。

離陸する機内で遠のく土佐の夜影を眺め乍ら無事に終った事と満足感でふと我に帰る思いがした。

良いゴルフツアーであった……。

同窓ゴルフ部へ

老いも若きも、上手も下手も、泣笑いの一日を満喫しませんか。もしこの「よさこい会」に入会希望の方は左記に連絡下さい。

大阪市南区谷町九丁目五ー十五　中田ビル
㈱大同エンジニアリング
松村隆司
☎〇六　七六三　〇三二一　代表

よさこい会　初のシングル　（公認）

現在よさこい会のメンバーは36名　ビジター12名（内高知県出身者6名）　計48名　が参加資格を有し、出席率約50パーセント（毎回6組～7組）

このメンバーの中で今度公認シングルプレーヤー誕生（9）その名は、奥代重恭氏（54才）スポーツ振興CC（ハンディ委員）所属がこの度八月当クラブ理事長より通達を受け来る九月二十二日シングル祝の宴を催す事になりました。

シングルプレーヤーは心技体が一つにならねばならないとか、特に心のシングルは大変難しい様です。

奥代重恭氏（昭23年機卒）現在54才での一桁入りは立派なものです。

奥代氏は大阪支部同窓会の副支部長でもあり、よさこい会々長でもあります。従ってよさこい会の運営には絶大なる御理解と御厚情を賜って居ります。

昨今ゴルフ場エントリーの難しい中、6組～7組と紹介して頂き会員一同感謝致している会長であります。このよさこい会の存立基盤を強固なものにして頂いても居ります。

改めて拍手を送って下さい。

栄えある重責を負う　お二人

大阪支部、支部長、山田豊氏（56才）（昭21機卒）が去る七月国税庁長官より筆頭特別調査官に任命されました。

現在大阪北区の税務署に勤務されていますがこれに至るまでには言葉では表現出来ないものがあると存じます。

工業学校機械卒業という専門外での活躍で国務の一端を背負い国家予算の形成を成す一員としてその責務は誠に重大且つ厳しいものがあると思います。

私共は税務署と聞いただけで憂鬱になりますが、まして筆頭特調官と聞けば企業代表者なら誰でも震えあがる存在の方です。

でもあまり税金を取らないで下さいね……

支部長さん……ハハハ……　失礼

しかし山田支部長のお人柄は誠に温厚でユーモアもあり、今流行のカラオケも大変お上手です。又非常に爽やかさの残るお人柄です。ゴルフの方はシングルではないにしてもお人柄は立派なシングルです。およそ税務署の方とは思いも付かない程です。いずれにしろ過去の御努力の賜ものであり、謹しんで敬意を表します。

今後共健康に留意して益々の御活躍賜りたく存じます。

大阪支部、副支部長、下村昇氏（54才）（昭24年機卒）が去る七月二十五日、文部大臣より、大阪教育大学附属天王寺中学校の校長に任命されました。又同氏は大阪教育大学附属高校天王寺学校の教務主任をも兼務されて居られます。

これ又、誠に多忙極りなく日夜心身共に休む事なく御活躍なさって居られます。

未来の我国建設を背負う若人を育てる、人的資源の開発は誠に難しく、過去の簡単な官民意識の向上などと言うものでなく、行政、学校、父兄、地域社会、この四本柱の緻密な連携と各々の真剣な取組みが必要とされる今日、先生方の御苦労は察するに余りある物があります。それを又総括せねばならない、学校長の激務は人知れぬ苦しみがあろうと察します。

『世は人なり』成長する子供によって未来指揮され世は創られます。読者の皆さん子供の躾は厳しく親の責任の基に子供に自覚と責任感を身につけて欲しいものです。そうすれば少しでも下村校長に間接的にお役に立てる事でしょう。

先生本当に御苦労様です。呉々も御自愛の上ご活躍下さいませ。

栄えある重責を負うお二人に絶大なる拍手を送って頂きたい。

インターハイ（軟式庭球の部）に出場して

三年機械科B組　吉門卓史

去る、八月四日～六日まで、秋田県の雄和町で開かれた全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の軟式庭球の部に出場しました。

インターハイの高知県予選は、三年生にとって、高校生活最後の試合になりますので、熱のこもったプレーが、くりひろげられました。

私達、須工チーム（吉門

卓史、武田幸三組）は、一試合、二試合と勝ち進んでいくうち、これならかなり良い線をゆくのではないかと思い全力で戦った。しかし、あと一勝と思いながらも準々決勝で対戦したのが優勝候補のチームで、あっと言う間に敗れました。

翌日、ベスト6チームを決めるため、4チームで再び、試合が行なわれ、私達のチームは二勝一敗と第六位で出場権を獲得しました。

テニスを始めて、インターハイに出場することが、ずっと前からの夢だったので喜しかった。

一年、二年の時は、もう少しの所で行けなかったので一層、うれしさがこみあげた。

勝てなくても、インターハイに出場できるだけで満足です。

練習でも設備も良いとは言えないし、なによりコーチや練習相手に恵まれなかったこともあり、僕たちだけで練習すると言うようなありさまで、それがなによりも誇れることだと思います。

インターハイの会場は、秋田ということもあり旅行気分で出発した。

会場につくと休むひまなく翌日から試合に望んだ。プレイボールがかかり、大きな大会で少し緊張していたし、練習不足や前日の疲れで思うようにプレーできず、相手のペースにはまってしまい、一セット取っただけで敗れてしまった。

県外に出ると、僕達の未熟さがつくづく感じられた。

あの緑の東北。秋田でくりひろげられたインターハイは、いつまでも僕達の心のはげみになるだろう。これからも、テニスは続けていきたいと思います。

旧校舎横の糺の池で大鯉が釣れる

5月25日の高知新聞に須工一年生、宮崎仁君が90センチの黒い大鯉を釣り上げた記事が載っておりました。

宮崎君に聞くと、その後更に大きな96センチの、金か黄色の大鯉を同じく一年生の甲斐一吉君が釣ったとのことで、糺の池には大きな池の主がいると聞いていましたが……。

幼児が乗れそうな大ゴイ（須崎市池ノ内）

超大物90センチの黒ゴイ

☆……須崎市の糺池……☆

高校生4人がかりで捕獲

▽…須崎市池ノ内の糺（ただす）池で、近くの須崎工業高校一年、宮崎仁君（一五）が、体長九〇㌢、体重一一㌔という超大物の黒ゴイを釣り上げ、近所の人らも『糺池にゴイは多いが、こんな大きなのは初めて』とびっくり。うわさを聞いた市民が見物に訪れるなど町の話題になっている。

▽…仁君は二十二日午後四時ごろ、友達ら三人と一緒に引っかけで釣りをしていたところ、『ゴツン』と鈍い当たり。糸をゆっくりと手繰り寄せると、バシャッと大きく跳ね、巨体が現れた。後は夢中で淵（ふち）まで入り、四人がかりでこの大物を取り押さえたという。

▽…使ったさおは長さ三㍍の合成品で道糸は5号。同池では三年前に七六㌢のコイが釣れたが、今回はこれを大幅に上回るレコード。太く長いロひげを垂らし、五百円玉大のうろこが黒光りするさまは池の主の風格十分。見物人らは『五月に大ゴイとはめでたい』と験を担いでいた。（須崎）

昭和58年度決算報告書

59・3・31

	費目	金額(円)	摘要
収入の部	前年度繰越金	2,152	
	入会金	464,000	232名×2,000円
	特別会計利息	614,084	農協591,084　四銀23,000
	雑収入	10,665	普通預金利息・名簿代他
	仮受金	2,857	年会費他
	計	1,093,758	
支出の部	会議費	7,000	理事会費
	事業費	690,349	開校記念品代　79,800 会報発行費他　586,460 調査費　21,680 その他　2,409
	通信交通費	18,860	電話代・切手代他
	事務消耗品費	24,034	コピー代他
	慶弔費	52,000	卒業証書丸筒他
	支部配分金	170,000	関東17,600　中京10,800　近畿31,800 高知47,000　須崎57,800　幡多 5,000
	雑費	13,200	振替払込料他
	計	975,443	

収入　支出　残
1,093,758円－975,443円＝118,315円

〈特別会計〉

	費目	金額(円)	摘要
終身会費	前年度末積立金	13,200,000	
	本年度納入額	1,800,000	新卒1,290,000　旧卒510,000
	計	15,000,000	

昭和58年度会計事務について

諸帳簿及び証書類等により監査の結果金額その他については相違なく、預金通帳・定期預金証書とも確実に管理適正に執行されている。

昭和59年6月11日

監査　下元征夫 ㊞
〃　武内徳雄 ㊞

昭和59年度予算

	費目	金額(円)	摘要
収入の部	前年度繰越金	118,315	
	入会金	426,000	213名×2,000円
	特別会計利息	670,000	農協647,000　四銀23,000
	雑収入	5,000	
	計	1,219,315	
支出の部	会議費	30,000	
	事業費	750,000	開校記念品代　60,000 会報印刷代　357,000 送料　260,000 振替用紙　15,000 封筒　18,000 調査費　23,000 予備費　17,000
	通信交通費	60,000	切手代・通話料その他
	事務消耗品費	30,000	用紙代・コピー代・その他
	慶弔費	100,000	
	支部配分金	214,200	関東21,800　中京15,000　近畿40,400 高知53,200　須崎77,200　幡多 6,600
	雑費	20,000	振替払込料その他
	予備費	15,115	
	計	1,219,315	

〈特別会計〉

	費目	金額(円)	摘要
終身会費	前年度末積立額	15,000,000	
	本年度納入目標額	2,000,000	
	計	17,000,000	

終身会費納入者名

昭和五十九年十月十日現在

昭和十八年

中平万年
田辺博造
橋本忠行
矢野亀雄
西川嘉明
木下善二郎
坂本忠男
田村耕吉
竹村昌孝
高橋巌
中岡当明
広田四郎
清家寛
長山象一
山中幸樹
山田弘市
海地清幸
前田托造
渡辺康太郎
門田正猛
下村晴宏
島崎憲一
平井寿之進

昭和二十年

矢野象一
松本興雄
竹下増秀
梅原健一
広瀬兼男
横畠元幸
宮本清
国広慶助
小松章洋
井口治郎
梅原務
中越青行
清藤良徳
池上蔦男
片岡孝人
浜田善三
堅田速雄
片岡弥太郎
浜口義夫
甲藤茂
張泗海
近森和夫
片岡命長

吉岡豊延
広瀬孔建
梅原康一
岩山安成
山崎義亀
大野純輔
北添健児
梶原誠幸
下元逸志
武内昌良
宮本悟
坂本正昭
遠藤源二郎
細木坦
広瀬昭一
味元三夫
田所三男
本則昌
寺田郁雄
吉村功
松沢真三

田所定夫
刈谷雅幸
戸梶茂富
森下桂郎
中平徳喜
大崎栄郎
楠本正昭
島崎馨
谷芳樹
山中正義
岡崎範夫
森下春茂
大藤益富
広瀬理
川添泉
岡村嘉夫
宮崎昭男
堀渕健三
島崎良一
高橋繁徳

山田豊
大川内巌
小谷浩三
亀山和夫
柏井秀有
渋谷邦治
笹岡勲
川村義隆
古谷義幸
谷口和夫
片田彰
高橋典男
山中繁
国枝幸治

昭和二十一年

昭和二十二年

昭和二十三年

武内徳雄
吉本静夫
野瀬勇
竹内正一
島崎茂
岡田信雄
吉村春政
吉川貞造
市川泰輔
和田富夫
岡林縣市
岡添家達
岡林民夫
谷脇正造
北川良輔
下村昇
奥代重恭

昭和二十四年

鍋島惟孝
竹村典和
谷武男
上岡親雄
傍士忠義
王子和雄
古谷正一
大崎哲
川村実
徳広善三
松浦定雄
中平利夫
堅田雄男
福島孝臣
藤本幸造
楠瀬富万
竹内良一
高岡正幸
横田雅範
福永徳七郎
西森勇
矢野定志
津野秀男
米女東作
横山三郎
石英男

昭和二十五年

岡村充喜
橋田井利暁
田正喜
堅田耕勇
横山豊一
加藤美代治
梅原滋男
島岡音喜
須内鹿田
西田浩造
森岡清
横田晴光
秋沢英男
池速水
北川万
西内豊
大崎静幸
浜田惣助
近森久重
上田泰正
大野幹雄
高野寿恵広
長山貞雄
武政良男
汲田正一
森岡淳

昭和二十六年

岡田恵
山崎一水
塚本拓雄
多田市彦
汲田信男
中野義則
竹村寿範
市川栄
垣内好士
松浦浩造
中村稔
田中穣作
福岡昭七
森田泰男
井上健弘
堀見和三
川村忠孝
中嶋孝良
三本正勝
藤田昭八郎
伊藤孝由
田上圭助
津野嘉三
斧山光男
田中良平
金子芳夫

昭和二十七年

前田耕一
前田重男
山崎定徳

昭和二十八年

田村士津夫
岡林幸保
梅原弘志
横川寛水
市川昌男
末松弥助
横山憲吉
谷本功

昭和二十九年

田村泰雄
田村武夫
若瀬竜雄
中聖徳
中川秀市
竹下哲男
古味忠孝
上田智明
橋本盛幸
北村靖
松本忠雄
矢野勝郎
横山清幸

浜好宏

昭和三十年

中野義明
吉村正策
長信仁
上田善右
武政博明
矢野保照
野並充温
上田浩倶
江渕俊明
高野照男
西森行雄
渡辺憲太郎
岡本順次郎
戸田修史
安並利益
角西信義
横山傳
竹内稔
西森幸雄
矢野晴英
坂井譲

昭和三十一年

正延善彦
奥田光男
川渕芳秀

藤田国基
谷満洲男
吉田遊亀
畠中光一
三浦裕礼
浮田国広
宮本恵美子
小野邦夫
高橋英雄
浜口正憲
安井壮三
浜口一
鍋島武彦
野島宥助
信高健一
山口利一
市川隆康
下元直正
田中章介
高橋淳二朗

昭和三十二年

高橋三雄
植田幸子
松村崇史
中西安男
植村豊樹
塩見崇敬

窪田邦彦
松下留吉
三宅世起
二見政雄
大崎光春
二宮安雄
三本和男
松村朱美
在木忠正
宮崎英雄
福井繁次
弘田貞夫
矢野親一郎
斉藤祐一
小原博信
岩本和子
梅原道夫
岡林博章
佐々木善喜
柳瀬忠勝
木村論
松井捷輔
橋田一三六
千頭英喜
北添栄

昭和三十三年

山崎吉広

竹村元宏
西村仁利
田村堯弘
沖本毅
堅田隆幸
氏原和弘
弘松章志
西森寿彦
市川精究
江口長
福井幸正
西森昌身
菅野佳紀
中村早夫
中川勝
柳本正一
西川嘉昭
山下幸三
豊島昌男
佐々木利昌
高橋昇
大崎正導
橋田昌和
中山賀一郎
岡田慶助
中川浄

昭和三十四年

竹内淳悟
島内栄夫
大窪英稲
明神任則
橋田忠宏
田村忠隆
岡本皓男
武森幸利
高橋昭之
中平俊郎
竹崎伸一
鎌倉彰
横田雅敏
西森研策
中平泰弘
増田浩
市原靖彦
吉村淳一
尾崎亘宏
中川栄一郎
石川宏哉
松浦政志
福富正香
東喜一
中村順暘
田村祥平

昭和三十五年

浜口博至
山本誠二
堀田洋介
刈谷茂正
山崎康夫
大原勉
鎌倉政清
小室貞夫
高橋勲
渡辺寿彦
津野昌英
山中重利
竹村精史
中平憲英
山崎之彦
吉村忠士
刈谷茂正
大崎健夫
中村正博
村上義栄
津野公夫
清水繁雄
岡崎伸高
上岡利夫

昭和三十六年

西森楯夫
江口文夫
下川原章
千頭且典
田村賢児
藤田和明
竹崎耕作
下元征夫
田村義幸
宮脇功
田村一利
奥代一士
市川泰志
安井修
白石忠臣
前田憲男
市川映
岡林謙
山崎忠雄
竹内正英
光原直己
植田寿一
福井通
上野一男
梅下弘育
瀬皓二

昭和三十七年

昭和三十八年

友永　昭三
土本　豊
島崎　武男
橋本　勝利
中城　一人
竹村　宏文
上岡　照雄
川渕　輝夫
西森　武光
鬼頭　三男
中岡　敬博
田野　茂光
豊田　悟

昭和三十九年

山本　勝喜
苅部　幸子
井上　耿介
小畠　康弘
岡林　敏雄
西川　政子
市川　公博
河野　英通
沖　良二
長尾　雄司
下元　道弘
小笠原　郁夫
松浦　茂彦

吉野　益世

昭和四十年

大崎　豊明
久川　章
片岡　正利
浜崎　満良
高橋　哲夫
内岡　肇
前田　文雄
新田　和男
石黒　明洋
崎山　弘太郎
浜口　博
野村　直信
合田　元宏
岡　弘
森沢　文男
真辺　晃
松浦　正
津野　隆
木村　正雄
正木　長生
渡辺　正俊
長谷部　俊夫
池田　達雄

玉川　良一
岡林　隆
西森　英夫
笹本　充範
在木　勇
山本　照幸
森　正彦
中村　徳文
田村　和嘉
山下　忠男
鈴木　栄
梅原　康男

昭和四十二年

竹内　正男
田村　正志
邑田　善之
下八川　哲三
小松　義治
田村　司
岡村　正雄
中居　一郎
真辺　義春
吉本　順一

西森　広利
下元　栄治
高木　良介
山下　博
山本　壮一郎
谷岡　直三
金子　誠
味元　俊一
広瀬　直記
今仲　六男
片岡　幸広
真辺　修

昭和四十三年

竹崎　貞男
池田　収一

昭和四十四年

西森　房司
下元　彰
松浦　育男
中野　正人
高橋　保雄
玉川　喜久夫
石村　秋実
西森　英一
山本　修

横畠　弘明
野島　鶴一
山本　道明

昭和四十五年

下谷　吉和
小野　道明
岡村　謙治

昭和四十六年

片岡　福彦
岡本　直美
中屋　保
箭野　文明
山崎　敏夫
黒石　明義
小田　道男
栄　正彦
佐竹　節男
横山　寿彦
橋田　辰巳

堅田　哥幸
広瀬　健三
出来　宏幸
井上　文男
前野　秀忠
三宮　幸弘

昭和四十七年

藤原　喜久男
佐々木　義信
小野　豊
中野　正興
古谷　好文

昭和四十八年

小田原　孝幸
和田　拓夫
西山　庸一

昭和四十九年

林　順一郎
森田　賢一
中井　富士夫
石本　正士
浜田　信男
森下　章博
黒田　一福
古谷　恭啓
近森　裕司
氏原　健一
大塚　厳

昭和五十年

中城　鉄夫
篠原　晴夫
仲村　茂博
村田　徳治
安岡　浩三

昭和五十一年

田村　正
中野　友喜
竹崎　実

昭和五十二年

大崎　昌則
岡　知秀
岡田　益穂
川上　徳男
西村　嘉泰
宮脇　潤正
谷岡　孝也
西村　豪
松本　晃
柳瀬　幸宏
川村　健次
下元　喜行
高橋　豊
西森　新市
松岡　貴也
丸岡　俊一
石川　早男
中屋　忠
西村　信之
浜口　順一
田部　伸彦
大崎　孝広

小野　三千雄
小野川　浩史
新改　一富
西田　太喜夫
森　光輝夫
山下　一夫
市原　正浩
岡田　郁夫
小橋　啓亮
遠山　正司
中山　安亀
山岸　孝益
藤田　友二
橋田　哲臣
海地　篤
橋田　春男
池田　幸夫
門田　昭二

昭和五十三年

川村　公孝
池田　和正
関　泰平
土本　雅人
永原　正一郎
山中　憲一
吉岡　利尚

大崎広明　大野孝雄　山崎晋司　松本健次　桑原真一　森崎淳二　中沢和明　中野俊彦　北添俊広　山中光典　片山幸広　藤田英雄　式地秀明　藤岡大成　高鴨覚　山中栄　吉本一仁　山崎浩一　政岡勝　浜田清志　野島勝行　国沢成雄　北沢文広　川村喜一郎　井上浩　明神直昭　嶋崎富三男　久万道夫

明神裕和　松本伸二　又川久仁夫　川西耕二　岡崎崇文　山添岳広　西本勲　小野山慎一　門田幸久　浜田壮介　安並朋宏　宮谷文雄　片岡幸彦　足達昭一　山本義仁　田中正博　堅田裕一　片岡広明　岡田知久　山崎明　北添裕生　種田裕二　宮地亮佐　岡添慎一　細木新　林稲男　川上正雄　坂井民夫

浜崎正人　尾崎保雄　浜口修司　岡崎明　大崎幸雄　嶋崎勉　間嶋和久　斧山喬　長山勝彦　海治和男　中原明雄　岡本広之　高橋孝平　山崎清　堅田浩二　明神達也　福井哲人　芝由喜　南部洋稔　明神正文　津野修　広畑浩　橋詰学　朝日幸年　久岡輝男　奥田和久　高橋望　楠瀬聡

矢野勝俊　大原祐二　井上健一　山口寿　山本矢澄志　松尾満　高橋清助　森光孝雄　高橋清　浜田俊次　岡村徹　吉川修　西村裕友　竹林一雄　西岡三明　大崎好一　江渕功一　奥崎秀次　保木利也　片岡雄児　岡山計宏　山崎幸利　森光出　岡林博幸　乾幸一　柏井啓助　市川清郎　岡村賢作

今橋秀広　安藤輝美　朝比奈祐介　昭和五十四年　森光俊彦　田中健喜　山崎林稲　岡林幸治　三井修　渡辺明　田中彰　市川隆弘　竹内一二三　隅田所仁　田谷久善　谷脇直人　馬場俊光　馬場宣光　山崎優　佐々木敏幸　宮崎さよ　片岡孝憲　武内秀樹　弘田耕一　小松和弘　山添勇一　浜田勝章

田上重浩　柴叔伯　島崎信一　川沢のり子　門田英二　堅田和博　梅原俊男　井上健一　市川敦志　吉本忠則　森光公浩　森下浩明　宮崎秀徳　松浦栄彦　広瀬永正　林弘茂　林智一　浜口芳文　間雄二　南部和寿　徳広明良　道家保次　田辺金造　佐竹義敦　佐竹利也　坂本定浩　原英二　大崎賢二

谷口久則　高橋信好　高橋一強　坂本博　片岡晴登　尾崎浩助　奥崎信夫　大川内稔　戎井良裕　梅原本自　梅原博弘　馬詰博司　植田正徳　植田孝成　島崎剛　山崎正広　山口司　森光須賀男　松元志郎　広瀬謙二　林尊文　林伸一　橋田典久　西村文広　西森幸二　鍋島一弘　中村由紀夫　長門和宏

矢野宝浩　森光隆浩　松田靖弘　西地繁広　長山弘行　中野孝雄　中岡朗徳　辻本真司　田村信行　谷中久良　高橋利男　笹岡幹男　桑瀬正通　小田啓二　岡本伸次　吉本浩　横山良仁　山岡秀晃　宮地立憲　松本勝　前田充由　堀川修一　林田美利　浜田俊彦　中城隆男　戸梶浩伸　津野光男　谷脇徳一

山本義文
上田育生
衣斐則彦
大野一宏
小野利耕
堅田浩司
北村幸浩
笹岡義男
芝崎裕二
須内貢
竹内智昭
谷信弥
田部貴久
中田正造
長山孝文
長田基
西田浩
松浦定男
松田俊市
明神孝郎
森一彦
吉田智欣
石田典久
岡本光弘
堅田孝光
佐藤和也
高橋広志
竹内優

田中登美夫
田村一彦
中谷智行
中村澄夫
西村元秀
柳本孝広
山川心一
沖吉孝文
刈谷俊英

昭和五十五年

青木伸二
青木富雄
麻田正志
井関直道
伊藤広幸
大崎信彦
甲藤章人
尾崎明彦
酒井則彦
三宮隆
柴崎唯夫
高橋信
高野幸一
谷脇一仁
近沢章友
辻安得
中山茂

長山誠
西森治夫
西森博章
能見清志
野島栄生
浜崎敏夫
浜田幸一
広瀬幸男
松浦伸人
松坂功二
溝渕健夫
宮脇靖一郎
森田一宏
山崎保
山本重
渡辺敏幸
吉岡真佐人
大崎稔
片岡博祐
沖守
国沢和
刈谷彦
桑原智
佐々木義晴
下元淳史
高木正充
高橋秀一
高野浩二

辻本隆裕
中田勝利
梨森千春
西森徳幸
西村佳典
西森正忠
能見圭至
野島慶次
松田英樹
松岡順一
森崎孝夫
森下彦
山本隆雄
矢野健二
矢野明
横山智英
渡辺邦博
石田道良
今橋広高
植村秀幸
下元寿夫
高橋祐司
西村公一
西森寿亀
弘瀬富成
溝渕建志
森裕

山岡正人
山下真司
山脇忠司
大川忠豊
小田修志
織田靖藏
黒原佳彦
中内正知
藤本修
松田貴
松浦典久
松本正広
市川和俊
八木昭介
森下昭仁
大崎幸始
大崎一男
大野智
岡村弘明
岡崎三男
尾崎義喜
片岡弘幸
木下讓二
楠目寿
近藤昭
酒井満
坂本卓
竹内信

田竹宗市
田村明彦
田中浩至
橋田道明
浜田和典
浜田俊
久岡孝善
細川源井
山崎和久
山下和己
岩佐敏弘
大崎真一
会所辰男
門脇昭司
津野孝
中脇一
中平兒
中志昇
浜田光啓
久原三生
壬生一光
明神良房
広瀬和弘
山本順一
中村一也

昭和五十六年

青山寿行
麻岡雄介

今城秀和
大崎正二
岡林靖
酒井悟
笹岡歳
笹岡人
高橋治
高橋賢
竹村彦
武吉政
谷脇喜
道家丈
徳広典
中内則
中村彦
中山夫
中尾親
西尾常
西森洋
橋田広
橋本幸
長谷川隆
堀部正
松尾靖
松本誠
水口幸
森田和
山下学
吉門英
出間文男

入交昭典
片岡宗温
笹岡久稔
下元安弘
白木賢二
高橋義浩
竹崎裕
田村英之
戸田雅彦
武市恵介
中屋剛
中田俊
南部孝之
西村太志
西森健一
野本信
橋田博文
浜口正
細木仁
松本健三
宮崎信一
宮地二男
明神隆志
松沢泰信
森本一
森宗幸
森沢幸
山崎敏
川渕章
森久弘

佐々木由紀男　笹岡敬助　坂元行広　川上稔明　堅田良一　大石高志　岩崎孝明　小西完司　吉村喜富　毛利圭志　藤原和雄　田村隆憲　谷　隆宏　竹内利夫　斉藤直文　尾崎達也　市川真貴　山本浩士　味元賢一　政岡幸喜　西川敏久　田中誠治　下元貞　小田浩司　楠岡章弘　岡崎光臣　依光広悦　山下正一

橋本英孝　中平宏児　竹内秀充　高橋厚典　田井志　嶋内志　坂口孝　楠瀬幸　奥田裕則　大西隆二　山崎幹晃　山岡久夫　森　和二　真鍋昌彦　松田憲斉　福本敏士　林　景祥　橋田島之　野村浩春　西村泰介　中村隆二　中平益彦　中畠栄雄　寺田　男　津野京二　高橋丈敦　下元俊三　沢村俊児　二

土居清隆　田元昭　谷脇二　谷　賢彦　谷島利史　田橋和彦　高岡正彦　笹井範記　酒瀬伸雄　楠重俊彦　川田英明　堅岡博　片　勇　斧崎徹　岡西秀一　大井節夫　打井博文　今上利伸　井田弘信　池上一秀　池上英浩　昭和五十七年　里見菊也　森　善傑　松田錠仁　堀瀬英二　広瀬英仁

中村正文　中沢忠義　遠山昭洋　下宮文男　三笹一起　坂本康志　近藤健司　岸本時仁　川上明夫　片岡勲　小島一彦　井上一宏　吉岡二　矢野栄一　山崎洋史　山岡良浩　森田英樹　明神真司　古谷正徳　浜口広明　野村哲也　西森森久　西森　明　中山浩弘　中森民二　永原三雄　鶴島貢隆　孝典盛

中村敦男　戸田佳彦　谷口勝廣　高橋直也　渋谷寿一　楠瀬博久　国友　勉　北村徳　片山孝　岡村望　大野明　横山本夫　山村勲　山中治　山下己　矢野光平　森　祐雄　森　国雄　森下　雅　宮谷　信　宮崎　彰　味　秀　丸谷　博　藤元　隆　藤岡　敏　弘原　浩　浜田　拓　西田　寛　西野　一　西村　幸　嘉男

村上政史　松本正進　前川信二　藤本理子　広田俊二　野島幸浩　奈路程　戸田道孝　寺村吉篤　田谷　光徳　谷　広幸　田中　浩　千崎　英司　桑原　敏　堅田　雅雄　堅岡　幸司　楠下　一　山野　正　矢並　広次　安光　人　森木　修　森本　道　宮地　仁　宮村　治　松田　文　藤浩　郎　橋田　聖　田　浩　忠　二　稔　徳

森田憲一郎　三本理茂　丸岡幸員　松岡祐陽　渕山和介　藤原　夫　久浜　民　浜中森　也　西森　彦　西川　工　西田　仁　西嶋　之　中脇　洋　中裕　之　谷康　一　谷郁　統　多樹　夫　下英　男　笹博　樹　坂雄　幸　川隆　成　尾崎　二　奥崎　也　岡崎　哲　大本　修　江川　幸　横西　洋　山山　央　山中　博　崎浩　斉　清明一

福永靖之　原田浩文　浜田恒広　浜口賢一　西森勇志　西村博文　西川保　津野　晃　谷　幸　谷　幸修　高岡泉　男　小靖　桑原広　楠瀬男　川村政　奥田和　岡村英　岡田弘　小崎　雄　大田二　梅木彰　安藤典　上田孝　和田俊　吉井和　山田浩　山井省　森崎雅　本岡秀　成男

福原靖幸
藤崎新一
堀部明弘
松田寿久
松本明人
宮尾竜生
明神利則
森本賢生
結城伸二
芳川濱之

昭和五十八年

池田佳正
市川泰彦
今橋清臣
伊与木孝司
岡村耕平
大崎正弘
大斐康二
大野二男
大森　学
楠瀬一明
楠瀬繁明
国広正倡
高橋一寛
竹内佳身
津野善博
丁野米二郎

中平幹雄
長山庄作
浜町忠文
藤田俊裕
牧野　央
政岡広宣
松山哲雄
明神忠男
本木謙二
森田宏明
矢野忠則
山崎輝男
山本建一
吉岡　淳
吉田　靖
池田浩二
石川浩章
市川昌孝
梅原博之
尾野晃彦
大崎文章
片岡健児
鎌倉由宜
楠瀬章広
桑原秀行
佐々木志郎
三宮浩嗣
下元　健

関本　靖
高橋義明
高橋国広
竹内慶三
竹内英雄
武田幸男
田中雄二
戸梶正和
徳広重太
南部知久
前田隆志
政岡慎二
森田浩司
柳瀬信幸
横山和是
渡辺昌光
秋本修身
岩崎博美
門田克彦
久保地啓介
国本高弘
倉橋幸次
斉藤敏明
高橋浩幸
田村雅忠
二宮英俊
橋田　覚
林　勝也

山崎貴正
片田秀孝
上北達也
北村　修
国広昌平
古味優司
竹内和広
遠山公明
戸田一伸
中川啓介
中越将仁
野島涼助
野瀬　剛
浜田寿男
弘田健也
真辺博一
森光一弥
横山恵司
渡辺伸二
足利和雄
在木正光
伊尾木彰憲
池田良夫
市川富章
井上　隆
岩本孝幸
植田栄之
大崎健央

小谷健児
川田和久
北川雅彦
木下孝二
楠目勝己
笹岡紀雄
白木嘉彦
竹下　正
谷岡聴史
奈路栄一
仁木民雄
西村公男
西村俊一
羽方英一
浜町成人
保木　豊
水田孝明
三本正男
森田政夫
森田雅史
森光清忠
柳瀬章信
吉岡伸仁
石井　洋
石本　司
猪野　譲
岡崎隆生
刈谷　誠

菊地　宏
国広典嗣
桑名勇人
笹岡　覚
下元賢司
高橋清広
田上広明
竹嶋啓介
竹林利一
竹本義郎
谷岡俊治
谷岡哲也
谷脇定夫
田村篤彦
津野博文
中沢定二
中村英助
中山功司
野村浩明
長谷川福弘
浜田誠人
浜村忠士
山口寿喜
山本時男
山本勇助
松坂幸宏
吉門正元
橋本優二

昭和五十九年

安藤博貴
石元倫忠
梅原幸雄
江崎和仁
岡林春仁
岡村庄二
加持真人
片岡正人
川田浩幸
北添　寛
小田倫弘
高橋義彦
長野　修
西森卓也
浜崎喜仁
濱田耕一
久岡三徳
広瀬　剛
藤原和人
正木　定
増本克史
松岡雅勝
美島隆二
宮地　明
森田宏明
森本達雄
柳野伸郎

横畠功起
横山康生
大野　明
岡林幸一
岡平一意
織田　蕉
小野秋広
片岡和教
北添　司
久保陽一
桜木雅弘
芝　睦夫
下元紀夫
下八川健一
高橋裕行
高橋文男
竹田敏幸
谷口　敏
近沢秀行
中山博幸
西森　斉
浜口弘行
原　賢也
藤沢守人
二見　浩
古谷明彦
正木勇一
森田正利

森部真介
山崎義久
横田明
石元良明
大西秀明
大西博之
岡崎平
川田浩
中越雅夫
中平祐成
森田芳和
横山豊
中畠浩行
濱田篤
松岡哲由
松坂伸彦
青木雄二
石川太生雄
市川英明
井上博文
岡崎雄一
岡林孝行
奥野淳一
小嶋利広
片岡一郎
久万陽介
古島孝幸
小松好彦

桑原丈司

菅野勇人
高橋昌孝
瀧平貞行
谷口聖司
戸梶高広
中山幸広
濱口洋一
福原雄一
平井浩二
藤本理
前田司
松岡孝浩
松田雅和
松本剛
明神智志
山崎宜孝
山中秀一
吉野正剛
石川忠司
市川卓水
今原隆二
市原浩幸
梅原則文
岩川真澄
大崎真一
岡林昭二
奥代一也

三宮裕
白木昭二
谷岡洋一
谷脇弘一
寺村春彦
戸梶久雄
西村光明
西山功一
野本等
濱口幸雄
濱田高徳
浜町寿治
古谷博幸
正木元和
高野庄司
以上

同窓会費
納入のお願い

数年前から後輩達は、卒業の時点で殆んどの者が、終身会費を納めてくれています。またそれ以前の卒業の方々からも終身会費（一万円）を納入してもらっていますが、同窓生の全体から見れば僅少です。

同窓会を今後大きく発展させるためにも、未納の方はなるべく早い時期に、終身会費を納入下さるようお願いいたします。

高知県立須崎工業高等学校同窓会会則

第一章 総　則

第一条　本会は高知県立須崎工業高等学校同窓会と称する。

第二条　本会は会員の親和、母校の隆盛を図るを目的とする。

第三条　本会は本部を母校に置き、正会員多数の地域（職域）に支部を置くことができる。

第二章 事　業

第四条　本会は第二条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1) 会報並に会員名簿の発行及び配布
(2) 母校の発展に関すること
(3) 会員の親和に関すること
(4) その他目的達成のために必要なこと

第三章 会　員

第五条　本会の会員は次の者をもって組織する。

1、正会員
(イ) 高知県立須崎工業学校を卒業した者
(ロ) 高知県立須崎工業高等学校併設中学校を卒業した者
(ハ) 高知県立須崎工業高等学校を卒業した者
(ニ) (イ)(ロ)(ハ)に在籍した者で会長が推薦し理事会で認められた者
2、準会員
高知県立須崎工業高等学校在校生
3、特別会員
(イ) 高知県立須崎工業学校旧職員
(ロ) 高知県立須崎工業高等学校現旧職員
(ハ) (イ)(ロ)に関係し特別縁故のある者で、会長が推薦し理事会で認められた者

第四章 役　員

第六条　本会に次の役員を置く
会長一名・副会長二名（内一名は本部事務局長を兼ねる）・会計一名・常任理事若干名・理事若干名・監事二名

第七条　役員の選出は次の通りとする。
(1) 会長、副会長、会計、監事は理事会において選出する。
(2) 理事は総会において選出された者および母校在職正会員とする。
(3) 常任理事は理事会で選出する。

第八条　役員の任務は次の通り定める。
(1) 会長は本会を代表しその運営を統括する。
(2) 副会長は会長を補佐し会長事故あるときは、その職務を代行する。
(3) 事務局長は本部事務局を主宰し、本会の事業を執行する。
(4) 会計は本会財政の運営に関し、予算収支の企画および収支の執行に当る。
(5) 常任理事は本会の常務を執行する。
(6) 理事は本会の重要事項を審議する。
(7) 監事は本会の会計監査に当る。

第九条　本会に名誉会長を置き母校校長を推戴する。

第一〇条　会長が必要と認めたときは、理事会にはかり顧問および相談役を置くことができる。

第一一条　役員の任期は二ケ年とする。但し再任は妨げない。補欠のために就任した者の任期は前任者の残余期間とする。

第五章 会　議

第一二条　本会の会議は総会、理事会および常任理事会とする。

第一三条　総会は二年毎に開催し、必要に応じ臨時に開催する。

第一四条　総会は会長がこれを召集し、出席者の過半数で決定し、可否同数のときは議長が決定する。

第一五条　理事会は次の場合に開催する。
(1) 会長が必要と認めたとき
(2) 理事の過半数の請求があったとき

第一六条　理事会は総会に次ぐ決議機関で次の事項を決定する。
(1) 本会の規約の作成変更および役員選出
(2) 収支予算ならびに決算
(3) 事業の計画およびその他重要な事項

第一七条　常任理事会は会務の迅速円滑な執行をはかるため、総会および理事会の決定にもとづき、直接業務に必要な事項を審議し実行する。常任理事会の決定および実施事項は理事会に報告し、承認を得なければならない。

第六章 事務局

第一八条　本部に事務局を置き、事務局長が統括する。

第一九条　事務局の構成は次の通りとする。
1、事務局長
2、会　計
3、母校在職正会員

第二〇条　事務局は総会、理事会、常任理事会の決定に基づき必要な会務を執行する。

第七章 会　計

第二一条　本会の財政は会費、入会金、寄附金その他の収入によってまかなう。

正会員は会費（終身会費）を納入しなければならない。

会費（終身会費）は一万円とする。

入会金は入学時二千円を納入するものとする。

第二二条　本会の会計年度は四月一日に始まり、翌年三月三一日に終る。

第二三条　本会は会計年度末に会費納入者一名に付二〇〇円の割合で支部に対する配分金を計算し、翌年度六月末までに還元する。

附　則

昭和二五年一月二〇日施行の本会則は、昭和四三年三月一日改正、昭和五一年八月一五日改正、昭和五六年八月九日改正する。

各種証明書の発行について
（母校事務室からの伝言）

証明書が必要なときは、条令の定めにより証明書交付申請書別紙（用紙は事務室に備付）を校長宛提出しなければなりません。（第二号十八頁の様式）

申請書には必要事項記入のうえ押印し左記金額に相当する高知県収入証紙を貼付してください。遠隔地からの申込みは事務手続に相当の日数を要しますので早目に申込みをしてください。又県外には高知県収入証紙は販売していないので、切手、又は現金を同封してください。

なお返信用の封筒には切手の貼付、住所、氏名、郵便番号をお忘れなくご記入下さい。

手数料は次のとおりです。

卒業証明書	一通につき二〇〇円
成績証明書	一通につき二〇〇円
単位修得証明書	一通につき二〇〇円

送り先〒785須崎市多の郷和佐田甲四一六七ノ三
高知県立須崎工業高等学校事務室
電　話（〇八八九四）②一八六一
②一八六二

証明書の件につき不都合または不明な点等がありましたらいつでも右記電話番号の証明係までお電話ください。

編集後記

第九号の会報を、お送りいたします。各支部の役員、並びに会員の皆様には、原稿をお願いいたしたところ、心よく原稿を送って載だき本当にありがとうございました。

会報の内容については、当初できるだけ会員の近況や感想等の寄稿を載せる予定でしたが、母校行事主体の会報となり反省いたしております。

今後につきましては、良い記事がありましたら事務局まで、ぜひ直接お送り下さい。次の会報に載せたいと思います。

尚印刷につきましては、須崎市内の笹岡印刷所さんにお願いし、大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

会員の皆様の御活躍をお祈り申し上げます。

事務局編集委員

昭和五十九年十一月二十日発行
発行所　高知県立須崎工業高等学校
同窓会事務局
印刷所　高知県須崎市東古市町二番十六号
有限会社　笹岡印刷所